

## 韓国・檀国大学60周年記念式典

### 日高理事長・学長が出席

#### 松木理事のスピーチも

1986年11月に、3校目となる国際交流協定を結んだ韓国の檀国大学(権奇洪総長)が創立60周年を迎え、11月2日に行われた記念式典に日高義博理事長・学長と松木健一常務理事(学務担当)が出席した。

前日に行われた協定大学関係者のフォーラムで英語によるスピーチをした松木理事は、84年のラグビー部の交流試合をきっかけに学术交流に向けての協議が進み、交流締結に至った経緯をまず紹介。次に昨年までで270人の檀国大生が本学で学び、本学からは180人が派遣されるなど活発な交流プログラムが行われていると述べ、同大から迎えた客員研究員が本学学生の異文化理解に大いに貢献していただいていることに謝意を表した。

また、交流プログラムの参加者から、語学を生かして両国間の交流に寄与する卒業生を輩出していることも紹介し、ますます教員・学生の交流を活発に行い、両国の地域社会の発展に寄与する国際交流を推進していきたいと今後の展望を述べた。



▲ウェルカムパーティーでケーキカットをする日高理事長・学長(左端)ら



▲左から楊萬植教授、松木常務理事、本学で博士の学位を取得した金碩子学部長

## 国際レスリング連盟

### 金子正明さん(メキシコ五輪金メダリスト)が殿堂入り

1968年メキシコオリンピックのレスリング・フリースタイルフェザー級金メダリストで、本学レスリング部元総監督の金子正明さん(昭38商経=写真)が、国際レスリング連盟の殿堂入りを果たした。日本人の殿堂入りは同時に選ばれた浦野弥生さんと合わせ4、5人目。

授賞式は世界選手権(9月17～23日=アゼルバイジャン・バクー)期間中の9月21日、同会場で行われた。



## 12月1日に今村法律研究室がシンポ「冤罪はいつまで続くのか」

今村法律研究室は公開シンポジウム「冤罪はいつまで続くのか」を開く。

「布川事件」「袴田事件」「名張毒ぶどう酒事件」「JR浦和電車区事件」の4件の冤罪事件を紹介し、日本の刑事司法の問題点、冤罪の発生要因について考える。好評だった今年の「冤罪」シンポに続く第2弾。

中でも注目は、熊本典道さんの講演「死刑判決文を書く想い」。1966年の「袴田事件」で静岡地裁の担当裁判官だった熊本さんは、袴田巖被告人に死刑判決を言い渡したが今年、「自分は無罪だと思った」と異例の告白。反響を巻き起こしている。

▼日時：12月1日(土)10時30分～16時

▼会場：神田キャンパス302号教室

▼お問い合わせ等：今村記念法律事務所の弁護士・矢澤まで。電話 03(3263)3520。

## 訃報

土志田征一氏(としだ・せいいち)元経済学部教授  
10月11日、66歳で死去。告別式は近親者で執り行われた。

野村 由松氏(のむら・よしまつ)元常務理事・元常勤監事・元監事・元顧問・元評議員  
10月14日、92歳で死去。告別式は同20日、東京都渋谷区の代々幡斎場で執り行われた。喪主は妻光子さん。

中村秀一郎氏(なかむら・ひでいちろう)元経済学部教授・元理事・元評議員  
10月20日、84歳で死去。告別式は同25日、横浜市の本牧ホールで執り行われた。喪主は妻和子さん。

## 《校友の本 紹介》

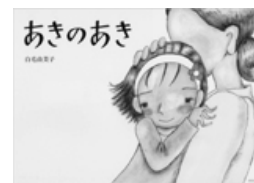
### 「大人も楽しめる絵本に」

白毛由美子さん2冊を上梓

校友の白毛由美子さん(平10文)が、絵本を2冊上梓した。

『あきのあき』(新風舎)と『わた毛ぼうやのぼうけん』(文芸社ビジュアルアート)。両書とも繊細な表現で子供たちの世界をいきいきと描写。『あきのあき』では絵も描いている。「子供たちだけでなく大人も楽しめる絵本を書いていきたい」と話している。

「子供のころから詩や文章、絵を描くのが大好きだった」という白毛さんは卒業後、デザイン専門学校に通いながら絵本作家を目指した。在学中は、能に関する卒論をまとめ、川島学術賞総代で卒業。「石黒吉次郎先生のおおらかなご指導をはじめ在学中の出会いや思い出一つひとつが今の創作活動の基礎になりました」と語っている。



## 第23回校友会グリーンカップゴルフ

### 秋晴れの中、64人がプレーを楽しむ

#### 個人・岩佐氏(平5経営)、シニア・青木氏(昭38商経)が優勝

10月12日、東京よみうりカントリークラブで第23回校友会グリーンカップゴルフ大会が開催された＝写真。恒例のこの大会に、今年は校友ら64人が参加。さわやかな秋晴れの中、プレーを楽しみ、旧交を温めた。

伊藤良雄大会実行委員長(校友会副会長)のあいさつの後、蒲田重勝競技委員長(同体育振興部長)による競技説明を受け、熱戦をスタート。競技終了後、甘竹秀雄校友会長、今福義幸校友会相談役のあいさつで始まった表彰式では、個人優勝の岩佐賢氏(平5経営)、シニア優勝の青木悟氏(昭38商経)、ベストグロス賞の古田達男氏(昭36商経)、団体優勝の硬式野球部らに賞状が手渡された。

なお、チャリティーホールでの賛助金5万8000円は日本ユニセフ協会に寄付された。

※詳細は校友会誌「アドニス42号」(08年1月発刊予定)、校友会ホームページをご覧ください。

## 「専大校友を訪ねて」

### 日本人の「一言」で進学を決意

日・中を結ぶ総合商社「大昌貿易行」服飾部門で活躍 王寛さん（平16商）

日本を市場に持つアパレルの下請け縫製工場の責任者をしてきた9年前、北京を訪れた日本人の何気ない一言が胸を突いた。「大学を卒業していないのに、『工場長』になれたのですか」。

ファッションデザインの専門学校を卒業し、デザインからパターン、縫製、プレスまで、すべての専門技術をマスターした。従業員250人を抱え順風満帆、自信を持って日本企業と渡り合っていただけに、学歴への指摘はショックが大きかった。仕事を辞め、「日本の大学を卒業しよう」と固い決意で来日。世話になった取引先の東京営業所長が専大卒だったことから本学を目指した。貯金を切り崩し、皿洗いやビル掃除をしながら勉強に励み、語学学校を経て、31歳で念願の専大商学部へ。



「なぜ？」と追究するたゆまぬ好奇心が、勉学への意欲をかきたてた。“人”にも恵まれた。ゼミ指導の飯田謙一教授（現名誉教授）からは、社会での規律や美徳を学んだ。「『人の悲しみの分かる人間になれ』と。忘れられないことばです」。

国際経営の研究を深めようと卒業して本学大学院に進学したが6カ月後、日本と中国を結ぶ総合商社への就職が決まり、新たな道に進んだ。

仕事は、東京を本拠に中国で製品化された「レディース」と「メンズ」アパレルの営業・管理だ。商品はデザイン性に富み、品質の良さを自負する。在日9年。「日本のお客は何を求めているのか。市場が分かるようになりました」。

中国と日本。双方が抱えるステレオタイプな相手国へのイメージを取り払い、真に手を組む関係を——と願う。

北京で結婚した夫人と二人暮らし。750ccのバイクでの通勤は、学生時代から続く。休日には毛筆を持ち、創作に励む。今年、書の日本書展と水墨画の現水展＝写真＝に初出展で初入選。現水展には恩師・飯田教授がかけつけてくれた。